

令和4年漁期イカナゴシンコ(新子)漁況予報

令和4年2月17日
兵庫県立農林水産技術総合センター
水産技術センター

1. 産卵親魚の調査結果

播磨灘北東部の鹿ノ瀬で、12月2日から1月4日にかけて延べ6回、文鎮漕ぎによる採集調査を実施した。

(1) 親魚密度

文鎮漕ぎ1曳当たりの採集尾数は33.0尾で、平年値を下回り、昨年を上回ったものの依然として低い値であった。年齢組成は1才魚が93.0%、2才魚以上が7.0%であった(表1)。

表1 親魚密度(文鎮漕ぎ1曳当たりの採集尾数)

	1才魚	2才魚以上	全体
今年	30.7尾 (93.0%)	2.3尾 (7.0%)	33.0尾
昨年	7.3尾 (93.5%)	0.5尾 (6.5%)	7.8尾
平年	114.2尾 (87.9%)	15.7尾 (12.1%)	129.9尾

(平年:平成22~令和1年の10年間の平均値)

(2) 親魚の全長組成

親魚全体の平均全長は96.5mmで、昨年の106.4mmを下回った(図1)。

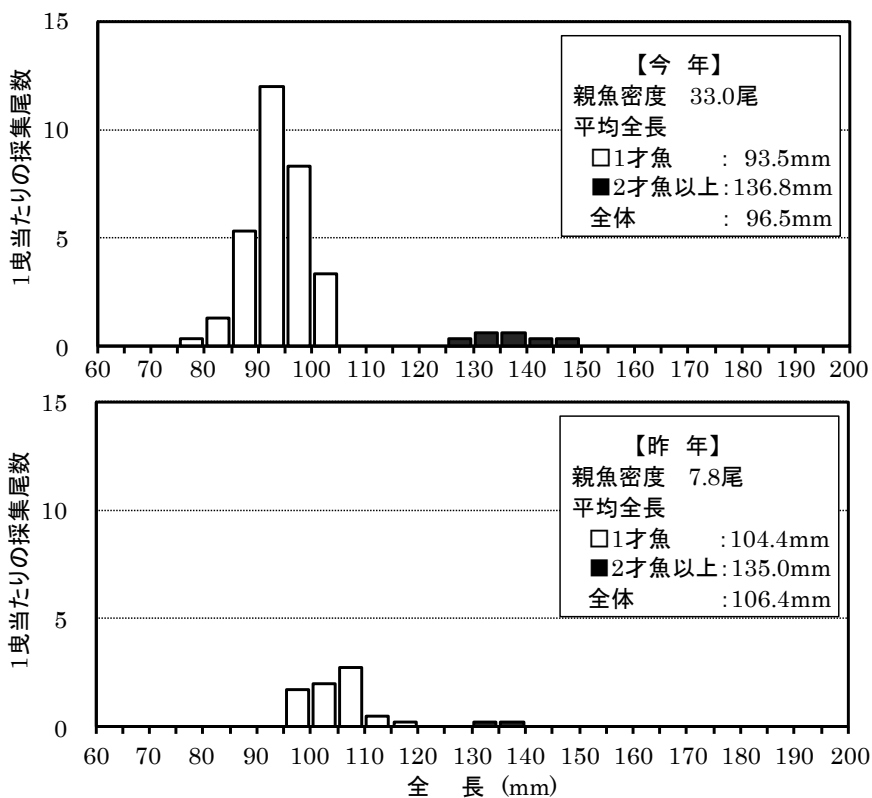


図1 親魚の全長組成

(3) 産卵量指数

今年の産卵量指数は 0.32 で、直近数年の中では比較的高い値であったが、平年と比較すると低い値であった（表 2）。

*産卵量指数：総産卵量の目安となる数値。1尾当たりの産卵量は親魚の大きさによって異なるため、毎年の親魚密度と全長組成から算出しています。

表2 産卵量指数(昭和62(1987)年漁期の産卵量を1.00とした場合の相対値)

	1才魚	2才魚以上	全 体
今 年	0.24 (75.0%)	0.08 (29.8%)	0.32
昨 年	0.09 (81.8%)	0.02 (18.2%)	0.11
平 年	1.16 (70.3%)	0.49 (29.7%)	1.65

(平年:平成22~令和1年の10年間の平均値)

(4) 産卵盛期

今年の雌親魚の生殖腺（卵巣）熟度指数は、12月23日から1月4日にかけて減少した（図 2）。また23日の調査では産卵が始まっていなかったが、4日の調査では採集した全ての個体が産卵を終えていた。以上のことから、鹿ノ瀬における今年の産卵盛期は昨年よりも遅いと考えられた。

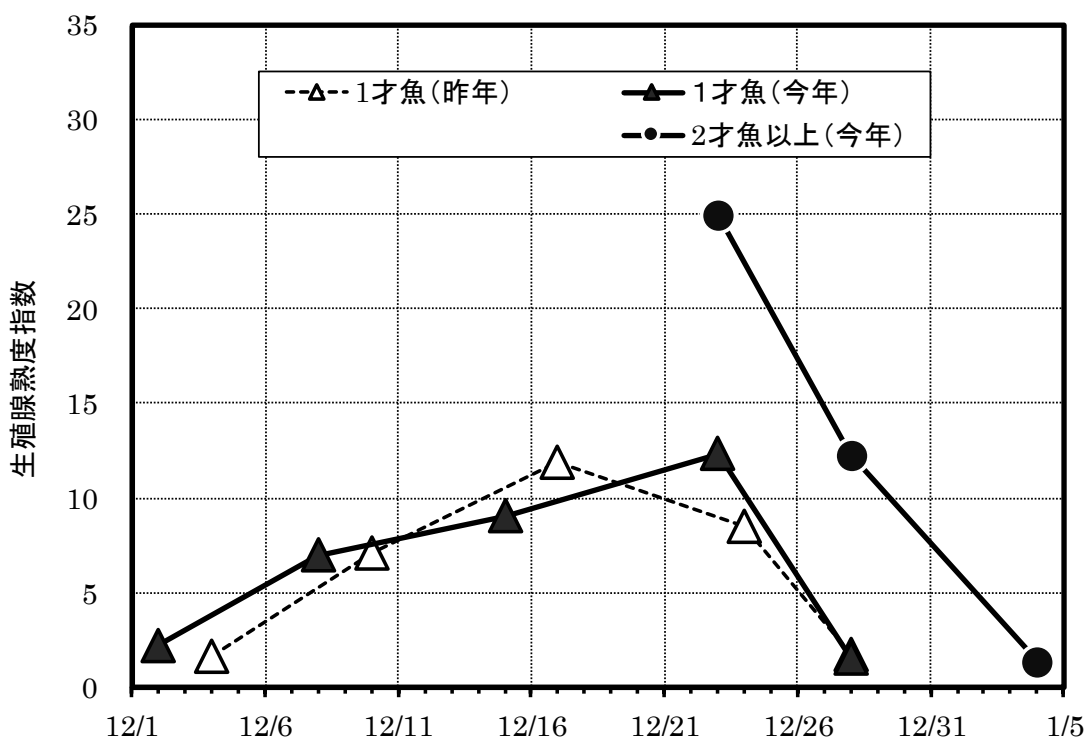


図2 雌親魚の生殖腺熟度指数の変化

2. 稚仔の調査結果

稚仔の調査は1月16日、17日、19日に実施し、表層から底層までの往復傾斜曳き（口径60cmのボンゴネット使用）により採集した。

1地点当たりの平均採集尾数は、播磨灘が3.4尾（昨年：2.5尾）、大阪湾が15.1尾（昨年：3.5尾）、紀伊水道が0.9尾（昨年：1.1尾）であった。播磨灘は昨年をやや上回ったが、平年は下回った。大阪湾は昨年を上回り、平年並みであった。紀伊水道は昨年並みで、平年を下回った。（表3、図3）。

全長の平均値は、播磨灘が6.4mm（昨年6.9mm）、大阪湾が6.1mm（昨年7.0mm）、紀伊水道が7.5mm（昨年7.9mm）であった（図4～6）。

表3 海域ごとの稚仔採集尾数平均値（1㎡水柱当たりの尾数）

	播磨灘	大阪湾	紀伊水道
今年	3.4	15.1	0.9
昨年	2.5	3.5	1.1
平年	11.1	15.3	3.3

（平年：ボンゴネットによる調査を開始した平成24～令和2年の9年間の平均値）

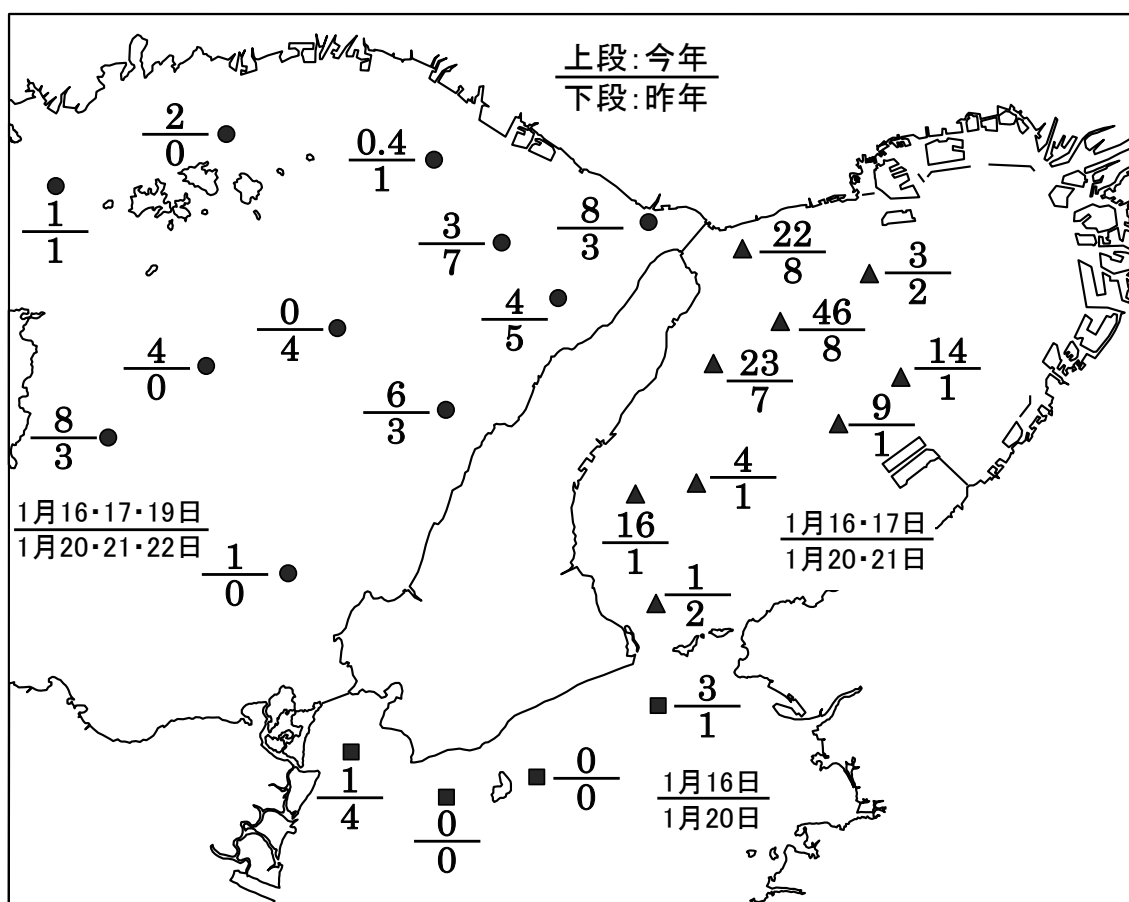


図3 稚仔の採集尾数（1㎡水柱当たりの尾数）

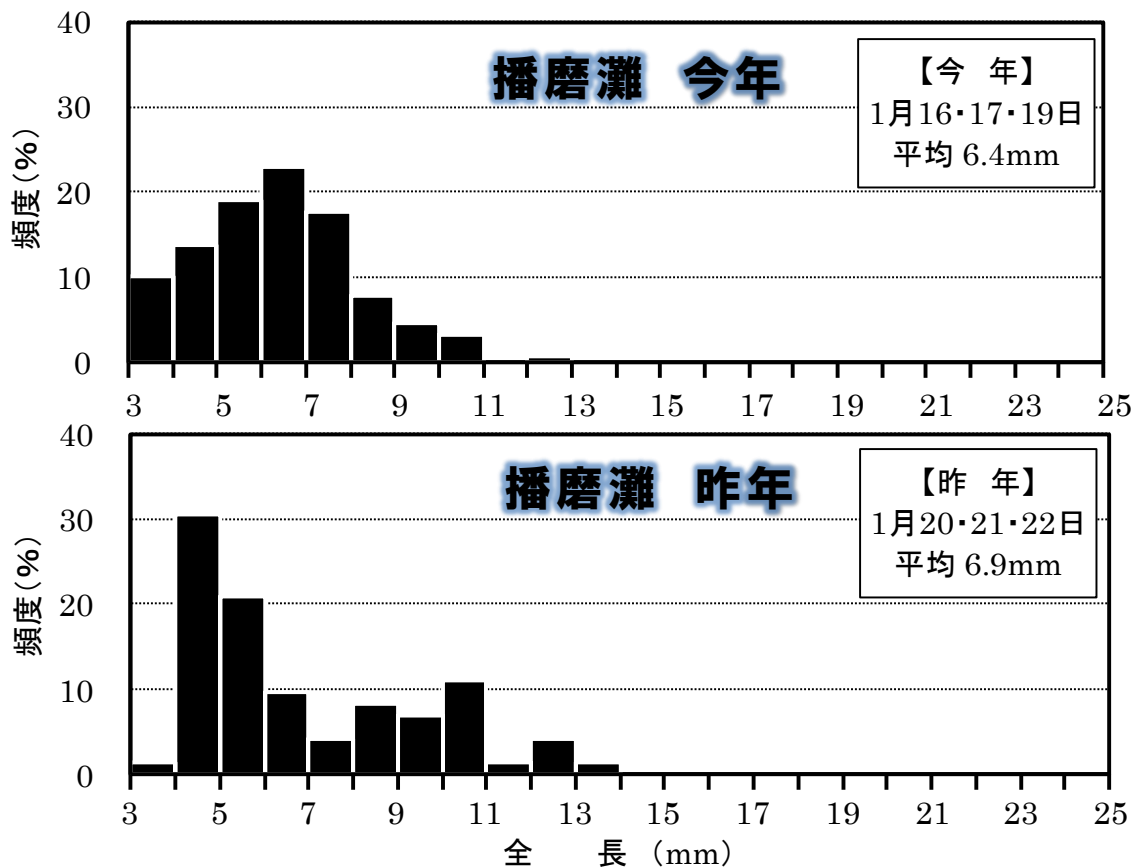


図4 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(播磨灘)

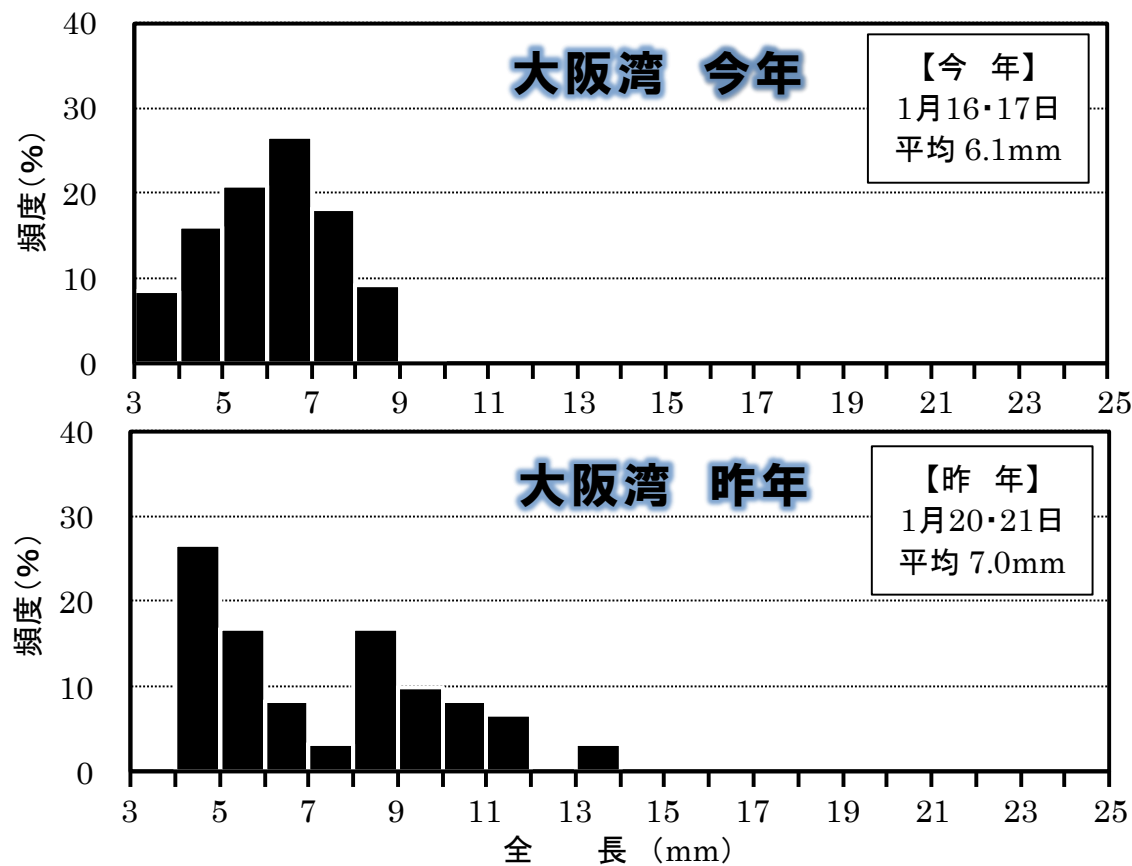


図5 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(大阪湾)

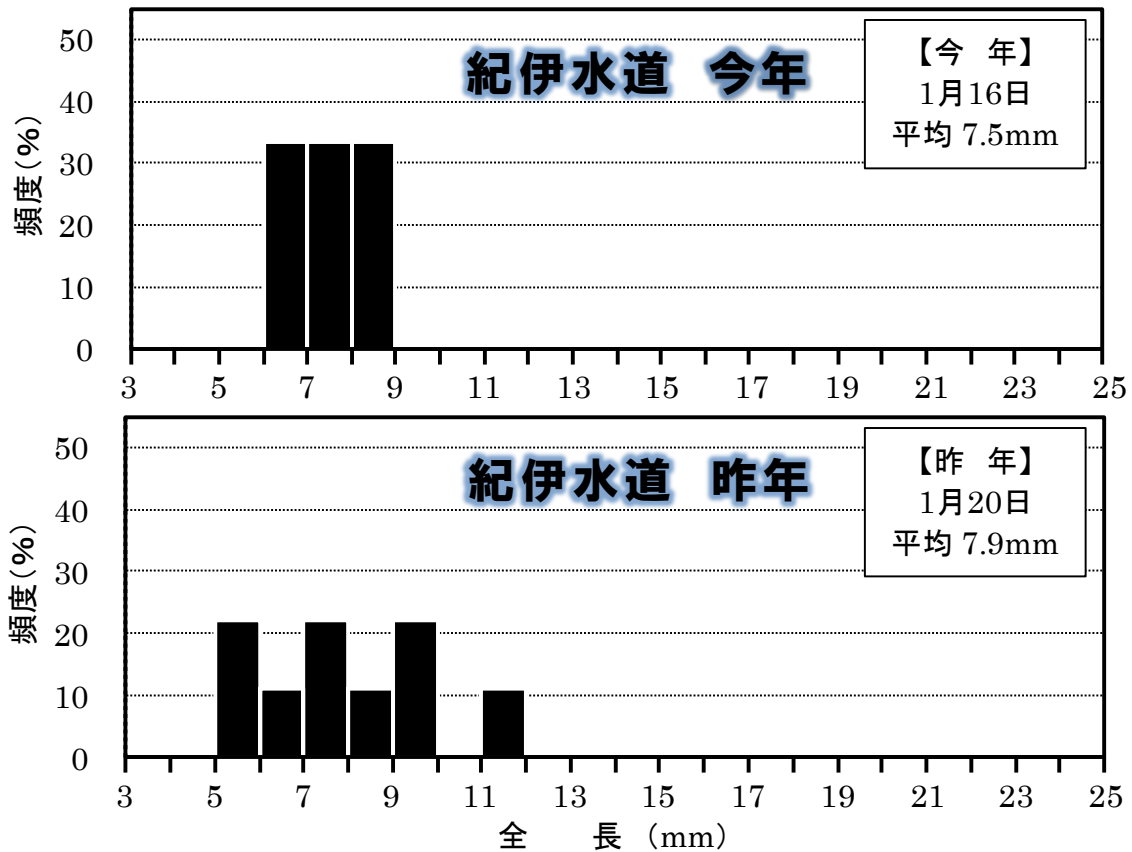


図6 表層から底層までの往復傾斜曳きで採集された稚仔の全長組成(紀伊水道)

3. 稚仔の成育の見通し

稚仔の成長速度は水温の影響を強く受け、水温が高いほど成長速度が速くなる。今年の明石海峡部の水温は、平年（平成 23～令和 2 年の 10 年間の平均値）に比べ低め～平年並みで推移している（図 7）。

1月 27 日に大阪管区气象台から発表された平均気温の 1 か月予報（向こう 1 か月の平均気温は平年並みか低い）から判断すると、今後の水温は平年並みか低めに推移すると予測され、稚魚の成長速度も平年並みか下回ると考えられる。

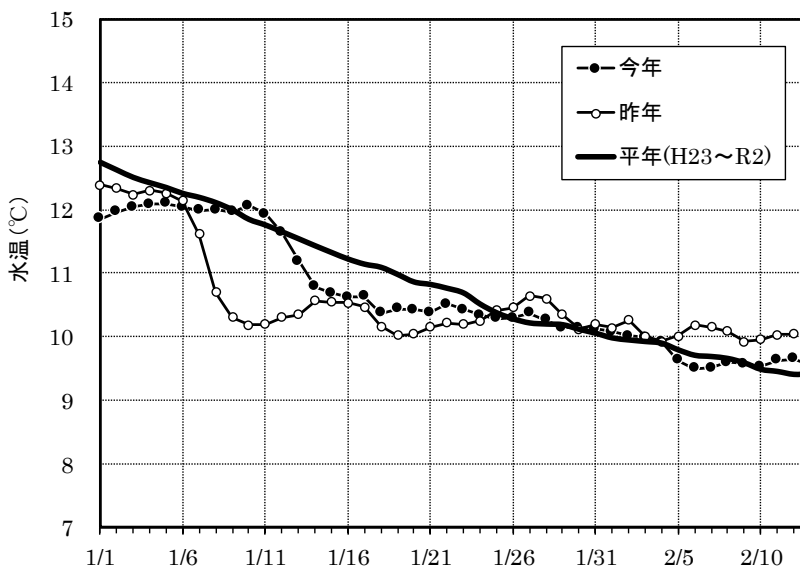


図7 明石海峡部1.5m層日平均水温の推移

4. シンコ漁の予測

昨漁期の漁獲量は、播磨灘、大阪湾、紀伊水道の3海域において平年（標本漁協における平成22～31年の10年間、2、3月のシンコ漁獲量の平均値）を下回り、3海域とも一昨年を上回った。

今漁期の産卵量や稚仔の分布量は、昨年と比較すると増加しているものの、平年を下回っていることから、“今漁期のシンコ漁獲量は、昨年を上回るものの平年を下回る。”と予想される。

※) シンコの網おろし日は各地区漁業者の自主的判断によるが、過去の経験から網下ろしが早過ぎた場合には不漁になる可能性が高い。網おろし日の決定にあたってはこの点を十分に考慮する必要がある。

また、依然としてイカナゴの資源量は低水準であることから、翌年の漁獲量を増やしていくためには、引き続き産卵親魚を残すことを考慮した漁獲や網あげの取組が必要である。